

特 07

414

歌舞伎座



本橋町三丁目  
歌舞伎座

應  
需 香朝楼筆



役人替名

- 北條右京の太夫義時
- 廣元入道覺阿
- 御小姓彌生
- 石橋獅子の精
- 鳥居新左衛門
- 前將軍源頼家卿
- 文章博士仲章
- 紀の國屋文左衛門
- 秦の公氏
- 三浦屋四郎次郎
- 武田五郎信光
- 俳僧師晋山
- 白玉の妹おさき
- 長尾新六定景
- 番頭權九郎
- 金窪兵衛尉行親
- 白酒賣新兵衛

市川團十郎

市川權十郎

市川壽美藏

市川新藏

市川猿之助

尾上松助

- 鶴の前實は千壽丸
- 北條朝時
- 市若切牛若傳次
- 胡蝶の精
- 同
- 兒駒若丸
- 新造白玉
- おさかの娘おたま
- 伊賀の左衛門光季
- 門門兵衛
- 朝川仙平
- 家主李兵衛
- 實朝の御臺竹の前
- お小姓小櫻
- 掃部の局
- 白玉の母おさき
- 右大臣實朝公
- 三浦屋の揚巻
- 助六女房おまさ
- 公曉阿闍梨
- 花川戸の助六

尾上菊之助

市川富貴子

尾上榮三郎

片岡市藏

尾上蟹十郎

市川女寅

坂東秀調

中村福助

尾上菊五郎

歌舞伎座筋書第拾四號

明治二十六年三月興行

第一番目狂言

東鑑拜賀卷 三幕

○序満久「修禪寺書院行親參入の場」舞たいの道具伊豆の國修禪寺書院の体よろしく爰に(新相中)の諸士兩人居並び居て○先達てより前の將軍左金吾禪室頼家卿執檢のはからひにて此修せん寺へ御幽閉然るに鎌倉よりたれわつて御機嫌伺ふものもなく兎角すぐれさせ給いねば自せんと御氣あらしくしく△われ△宿直いたすにも困つた事でゐるが是といふのも頼家卿中野の五郎の一件より北條殿を亡ぼさんと謀反をお起しなされしゆへト當時北條家の威勢盛んなる事をいふせりふ兩人へわたる爰へ(諸士)一人出てハツ申上り今鎌倉より金窪兵衛尉行親殿前將軍家御さげん伺として參上いたせりトいふ○△

何行親どの參られしとな此よしお奥へ申上んと爰へ掃部の局(秀調)わかき女臍にて出て來り、金窪どの御參入とあれば是へ(諸士)ハツト引返して入り直向ふより金窪兵衛尉行親(松助)をばし直垂よて出て來り會釋よろしく在て(秀)是は兵衛さまにはよふお出シテ鎌倉よりのお使でふり升るか(松)いや、將軍家の御使ひにあらす行親私しの參入よろしく御披露をト兩人よろしくせりふ渡つて(松助)は始終頼家卿の御幽閉を悼み親切らしくいふて氣を免させ様といふ思入(秀調)は此行親よは由断は出來ぬと其動作に心を用ひるトいふ件有て奥方頼家卿(權十郎)道腹白綾一本さしにて出て、ヤア行親汝義時の命を受けて此頼家を殺しにまゐつたなト御氣色あしき体に(松)ハツト平伏し(松)コハ存じよらぬ御意いかに君を殺し奉るなどの野心あつて參入いたせしよ非ず君には此程より御病氣と承はり御見舞の爲參入せりト他事なき思入にていふ掃部の局(秀)も傍にてそれを執成を事有てトイ



(權)われいさゝかのあやまちを義時申立て此伊豆へ押込めしは彼れ一家が業刺さへわが公達千載は出家させ一旦實朝の猶子となせしが聞けば夫さへ鶴ヶ岡の別當職に補任せしどの事ト北條一家が悪逆をせむる(松)仰せ御尤もには候へども是逆も御世公尼君の御差圖頓て君の御疑ひも晴れ鎌倉へ御歸りならんト(秀)も俱々頼家をなだめるト(松)今日は退出いたし明日又候伺いたさん(權)行親大義なりし(松)ハ、ツト松助は邊りきよろしく思入して下手へは入る跡(秀)今日行親参入いたせしは心元なし君には必らず御油断あそばし升るな(權)イヤ彼ら如きもの何條事を仕出さん(秀)イエー候茲の北條一家のものその御油断が御不覺トよろしく意見をいふ(權)シテ温湯の用意はト湯へ入らんといふを(秀)油断ならざる行親が居る間は御風呂へはト湯へは入つて成らぬといふを(權)イヤー其心配は取越し苦勞女トしき事をいふなト風呂へゆくといふ件にて道具廻る○同浴室頼家公最

期の場、舞たいの奥深に石の湯風呂水溜板敷等よろしく温泉の体爰に(諸士)兩人居て、兼て金窪氏より北條殿の内命なりと今日我君御風呂へ御道入の節をうかがひ密に弑せよとの内命然し強力無双の我君どふか甘くやりたい物だト言合し居る爰へいせんの行親(松助)出で、まだ左金吾殿には御出がないか(諸士)只今風呂の加減を申上れば直に是へ御出は必定然らば此由申上ん(松)万事の手筈はよろしふるか御苦勞ト敵役よろしく言合せ(三人)上下へ忍ぶ上手よりいせんの頼家(權十郎)先に局(秀調)此外(侍女)女形六人付添ひ出て(權)風呂のかげんはいかゞヒヤ(諸士)調度よろしふムリ升(權)然らば直にト帯を解かふとするを(秀)アイヤ我君わらわが頻りに胸騒ぎといひ夕邊の夢見のわるさ何卒御風呂へ召す事ト意見の思入(權)イヤ局が女の臆病未練案事るに及ばぬト意見を聞ずし浴衣を着替る件よろしく(權)コリヤ局其餘のものも次へ参れト是にて(秀)餘義なく心残しては

入る跡へ(侍女)一人太刀を持って居る處へ行親(松助)軍卒(大勢)引連伺ひ出て突然侍女の持たる太刀を奪ひ(權)へ懸る(權)扱は義時が内命受われを殺しに來たるにつくいやつト是より鈴の緒を遣ひ烈しき立廻りト(權)は(松)の刀にて最期を遂げるといふ脚色よろしく(權)恨み重なる北條一家今に思ひ知れト無念の体にて幕直引返しよ成る

○玉細山巖窟公曉參籠の場、舞たい高き山組爰に岩穴あり山幕を張てあり幕あくと大薩摩の唄に成りよろしく有て此幕を切て落スト爰に公曉阿若梨(菊五郎)袈裟衣行衣にて傍に兒駒若丸(丑之助)枯木をあつめ焚て居てドロくにて(菊)目をさまし、扱は今のは夢でありしかトこなし有て、兼てわが父頼家卿伊豆修禪寺に御幽閉之時北條がはからひにて金窪行親を遣はし密かに弑し奉りしと聞しが夫を其まゝ夢に見しは父の御無念を告げさせ給ふか但しは出家堅固の愚僧をば墮落させんと妄想の爲すわ

ざかト岩屋の内の本尊へ向ひ念誦の体此内(丑之助)の兒いろく師を勢はる事有て(菊)汝も此公曉世にあらば烏帽子親と成りあつれば元服させ三浦小六平太某と立派の男よして遣らふもの今は出家の此ありさまト歎きたまふ件よろしく床の上り有て爰へ前幕の(秀調)掃部の局更たる旅形(菊之助)同人姪鶴の前にて出る跡より鎌倉の武士安東次郎(翫太郎)軍卒大勢よて切結び乍ら出て來り兩人手負ふ成り(翫)ヤア汝こそ三浦義村の妻かもん并びに姪の鶴の前こそ實は男子にして頼家卿の御二男千壽丸生捕つて鎌倉へ行くサア尋常にト是を(秀)イヤー是成るはわが姪千壽丸さまはあらざるぞ(翫)ヤア隠して易なし男子たる事汝の家臣の訴人よて明白なりト是にて是非なく(菊)の千壽丸の男に成り是より大勢ト立廻りト手負に成る是を山上より公曉(菊)見て恟りなし、ヤア他人不入の此山中血をわやめるは不届やつト此一聲は恐れ(翫太郎)初め軍卒逃ては入る局の(秀)見て、ヤあなた



公曉さま(菊)誠にそちの掃部の局ト名乗よろしく此内  
(菊)の千壽丸はあへなく最期の体此程(菊)わが父頼家  
禰室を弑せし北條義時の計らひならんといふを(秀)一  
旦佛門に入りたまひし御身何卒父君の御菩提を吊らひた  
まひ教へを破りたまふなト弟君千壽丸さまや、もすれば  
義時亡きものにせんとす社わが姪どなし女子の姿に扮  
し置しに味方のもの、訴人にて危うく成りしを駿河路へ  
落延んとして懸る御不幸ト過越し方の薄命をかたる此件  
上るり有てト、局も落入る(菊)是を聞北條一家の不忠不  
義今に恨み多報ひやらんと珠數の緒を切り經巻を引さ  
き焚火に入りて燃るといふ件よろしく有て幕  
○二幕目 北條大倉邸公曉櫻應の場 ぶたいの道具北條館  
よろしく爰に家來(三人)住ひ居て、今日は恐れ多くも將  
軍家右大臣御拜賀として鶴ヶ岡への御社參朝から塞ふム  
るがどふカ雪でもふらねばよふム、夫に付只今は御別  
當公曉阿若梨を御招待あつて御櫻應さいち最是へお

出でらふト此せりふわつて床の上りよ成り向ふ  
北條右京大夫義時(團十郎)次に公曉(菊五郎)緋の衣七條  
の袈裟青坊主にて兒(二人)付そひ、伊賀の左衛門光季  
(市藏)義時の二男江間次郎朝時(菊之助)同陸奥三郎重時  
(染五郎)同四男相摸次郎政村(雷藏)いづれも名はし直垂  
にて付て出て並能居ならん(菊)今日の櫻應過分ゆるる  
(團)御誼かたじけのふふるいまだ御刻限もムれば是まで  
御ゆつくりとなされ升(菊)昨年鎌倉に下りしより修行の  
參籠にいとまなく今日のもてなし和殿の芳志ト悦ぶを  
(團)恐入つたる仰せ君は右大將家の御嫡男一度は御養君  
にた、せたまひし御身世が世であらば御位も高く日本國  
中の大小名にかしづりれたまふに御運の末は言乍ら御  
出家のさぞや物さびしふ入らせられんとわざと哀れにい  
ふ(市)實に左様御父御遺跡は御弟千壽丸さま御嫡男一  
幡丸さまには先立させたまひ(團)實にあじさなき御遺世  
さず口をしふ思しつらんと上るり有て是を聞(菊)信切ら

しき詞かたじけなふムるが浮世をすてし此公曉いかでか  
人を恨み申さん只後世の營みが肝要なりト數珠つまつ  
て頼着せぬこなし(團)イヤ感じ入たる御行狀然し御父禰  
室御逝去の砌り種々の取沙汰自然北條一家を君よにお恨  
みならんかと夫が心懸り夫故御疎遠なき様何とぞ此上と  
もといふを菊五郎無念の体にて(菊)いふな義時ト是より  
厄御臺をさす、め我父を伊豆に幽閉し奉りしも皆和殿  
のはからひまつた比企判官能員が一家を亡ぼす其上に我  
兄一幡君を燒ころせしは皆和殿ならずや父を浴室に弑せ  
しは誰が差圖でいたせしぞ(團)サア夫は(菊)和殿執權職  
にてある上は存せぬしらぬとはよもや云れまじ(團)中々  
もつて左様な義を(菊)然らば誰のさしづなるやト是にて  
團十郎無言で居る事(菊)主君を弑せし義時大罪のがれん  
なるまいがなといふを(菊)の、染、雷、市)は無念と思ひ、  
公達迎あまりの過言ゆるさぬト刀の柄へ手を懸るを團十  
郎よろしく制して(團)尾籠なり梓共トよろしく思入有て

形ちをあらため(團)理りしごくの御尋ね申わけはわれ共  
義時一心に引受け申上る詞なしトうつむ居るを(市)ろ  
りヤ又なせ申わけをなさらぬぞ(團)さればなり金吾御他  
界の事此義時がはからひと思召すは御尤なれども當將軍  
家と御縁つなき此事あらはに申上なば主家の恥辱左はな  
くども今に露顯いたす事申上たどて何の手柄に成るべき  
が只、此身に引うけト心有氣にいふ(市)はいらつて  
(市)イヤ、夫の御分別が違ふト此光季始終義時の惡を  
覆ふといふ思入にてト、頼家卿を弑せしは當右大臣家  
の上意に出でたる事といふを(團)是はしたり光季誰がも  
るして一大事をわからさま口外いたしたとわざと立腹  
のこなし(市)ヲ、サたとへ執權職の威光でも我君の御誼  
は背かれずト是は、頼家卿を弑したまひしは是此日本を  
東西にわけ關西の千壽君關東は一幡君へわけたまふ時は  
問注所侍所いづれも威權を失へば是を憂ひて廣元義盛  
厄御臺を説きす、め將軍家を失なひしに相違なしト始終



北條の悪をたすけるこなし(菊)は是を聞半信半疑のこなし此件上る有りて團十郎は實なき思入にて(團)仕なしたり伊賀の左衛門よしなき密事を言ちらし御主君の悪事迄つげたるか此上は力なしト是より和田大江が諺言をいひ頼家卿の御無念さかした思入(菊)左程我父を敬ふなら父を弑せし金蓮行親をなせ侍所にいたせし(團)夫でわが身の潔白をわらはすなり廿餘年の昔し行親と此義時那須の御狩の時に口論なし久しく不和を重ねしが右大臣家此不和の中を御存じわつて此密事を云付たまひしより夫故間注所の行司と迄昇進したるも皆右大臣家の御差圖なり(菊)然らば又此公曉が養子を廢し出家はなしたる(市)イヤ夫は厄御臺のおさしづ右大臣家のお心より出し事(團)夫で義時しげく諫言なせと御傍に廣元わつて遮ぎられ力なしトこなし有て、猶も此上御疑ひをどかせらるゝ證據に御覽に入れん朝時某しが秘密の手箱を是へもて(菊)ハット奥より手箱をもつて出る(團)某しが諫狀

まつた廣元が疏狀これにありト箱を取出す(菊五郎)是にて件の箱をわけ内よりいろく書の類を出し見る事此内一通の書付を出し見て(菊)前左金吾禪室の公達善哉君公曉の事に付神明佛陀をおどろかし奉つる事トよみ懸るを(團十郎)悔りなしその書面を取て(團)其起請御覽に入れべき品でらぬ(菊)我名を乗て神佛に誓ひをたてたる起請文止められるは扱ひ此公曉を殺す所存であらふな(團)イヤく中くもつて左にわらず是成る起請は御らんに入れぬが御身のお爲ト心有氣にいふ(菊)然らば見せられぬか(團)いつか一時は改めて披見の時せつがらふ(菊)扱こういよく此公曉を亡さものにせん起請なるかト問つめる市藏見兼て(市)アイヤ京兆殿其起請拙しやも血汐をそゝさし一人貴殿が御らんに入れぬとなれば此光季が同意の姓名く是にて相違やうか(團)サア夫は(市)然らば御らんに入れんサア其起請おわたし下されいと書付をひとつり(市藏)讀上る此書面は、頼家卿伊豆の山中

に御無念の最期をどげたまふ是佞人の所爲なり遺子公曉禪師を世またてわれく頼家卿の高恩に報じたてまつらんといふ起請文よてト公曉にむはんをすゝめるといふ計略よろしく是を聞(菊)コハ思ひよらぬ起請文假初も佛門に入りし此公曉神爵の程恐ろしくトわざと驚きし体圓、菊互ひに心をさぐるといふ件よろしく有て(菊)何にいたせ最早歸院いたさん(團)然らばお見送り(菊)イヤ着替いたせば其まゝト立上り思ひ出したる体にて(菊)アイヤ京兆殿今夕右大臣家拜賀の砌り和殿もかならず供奉でらふな(團)御意の通りにムり升る(菊)シテ供奉のお役は(團)別にお役はといふを(市)京兆殿より御劍のお役にムり升る(菊)ハット思入有て氣をかへ、晴のお役御苦勞でらるト是を團十郎扱ひといふこなし菊五郎は奥へは入る跡(團)残り油断ならぬ公曉といふ(市)思ふ様に参つてらるなトよろこぶを何食ぬ顔にて(團)イヤお見送りをいたさふかト衣紋を直すよろしく幕

○同返し「鎌倉御所諫言の場」ふたいの道具は鎌倉柳營御庭所の体よろしく爰に右大臣實朝公(福助)大紋のさしぬきにて鏡臺を扣へ、秦の公氏(壽美藏)實朝の御髪をわけしまひし体下手に御臺竹の方(女寅)侍女(二人)付添ひト實朝鏡に向ひ見て髻の下所に毛が一本のこり居るをどつて(福)公氏はと出す壽美藏とつて平伏なし(壽美)御もどりの毛を残し恐入てムり升る(福)イヤく残り毛でないわざと一筋ぬきとつて余が形見に取らするのじやト是を聞て皆く氣に懸る思入にて(壽美)御拜賀の御式にのぞみて目出たからざる其御詞といふを(福)雷光石火の世の中いつ死ぬるとも知れざる命なには忌はしい事があらふがト心に懸ぬこなしト、えぼし直衣をもて(侍女)女)ハット奥へは入る御臺所(女寅)は下手の紅梅の花の盛りを見て(女)アレ御覽あそばせ軒端の紅梅見事な事でもり升る(福)何さま四五日見ぬ間に南枝も北枝もト此内福助考がへ居る事よろしく爰へ(侍女)直衣えぼしを持て



出る是をよろしく着る事有て(福)伺候の面々これへ(壽美)ハット下手へは入る此内福助は梅の花を見て老がへ文臺を引よせ短冊へ歌を書て女寅へ向ひ、當座の一吟御らんあれト女寅とつて(女)いでいなばぬしな宿となりぬども軒端の梅よ春な忘るなト壽美藏も見て眉をひそめ、公氏如き未熟ものが評語は恐れ入り升るが恐れ乍らこれは禁忌の和歌何とやらト氣に懸る思入(女)はんに主なき宿と遊ばし升た(福)ハ、又しても心懸りどのたまふる人の壽命はあしたの霜夕邊のかけらふ(女)デも今日は目出たき拜賀の折から(壽美)御髻の御形見といひいかにも吉兆ならず(福)凶事のつげと言る、が生死流轉の境には吉もなければ凶もなし無益の心勞したまふなト是にて兩人と成る爰へ下手文章博士仲章(權十郎)時房、親時、景盛の外皆直垂にて武田五郎信光(新藏)長尾定景(猿之助)の外大小名(大勢)出て下手へ並び(權十郎)今日トせりふ有て、御拜賀万事整ひ(皆)く一同恐悦申

上奉り升(福)祝賀の伺候大慶なるぞト此内新藏、猿之助氣に懸る思入よろしく有て(新)古老をさし置きわれより申上てい恐入れど何卒今夕の御社參御見合然るべしト是より(猿之助)兩人にて、今朝景盛南御門の下を通りしに御家根より首なき鳩落ちたり鳩の源家の守神の使はしめその首のなきは不吉の兆トさへぎつて見合せ然るべしといふを北條方の(敵役)いや、夫は女童の申す事にて何條侍ひのいふ事にあらず(權)殊一旦仰出されし御大禮決て延引成り難しといふを(新、猿)アイヤ我君の御爲を思へばこそおどめ申(敵)アイヤ御勤め申すト双方あらずいよろしく此時下手にて、暫らくト聲をかけ(團十郎)大江廣元入道覺阿坊主かつら直垂の上へ袈裟をかけ出て來り寶朝公の顔を見て思はず落涙して(團)此覺阿生れてより涙をこぼせし如事なし是先刻より信光、景盛御意見申上し今夜御社參の事何とぞ思ひ止まり御延引仰出され然るべし(福)思ひがけなき其方といひ御臺所

までが延引の願ひ凡そ大禮に先だち不吉の兆なぞあるよし事なりいくら申しても延引相叶ぬト思ひ入つたるこなし是よてこなし有て(團)いかにも是程御支度ありし御大禮御延引は相なるまいが覺阿一つの御願ひなり何卒御聞届下されし(福)何願ひといふは(團)今日の御社參夜陰をおくりあげ遊ばして夕刻御歸館と御改め下さるべしといふを(權)其儀はけつして相成升まい大臣家の佛事は白晝なれども御社參神事はかならず夜陰これを變へるは神への思入(團)そは御尤もなれども將軍家御身にはかへがたしト此筋の爭論よろしく有て團十郎此上は申なしといふ思入にて、次へ持參せし品是へト是にて(諸士)臺へ載せし腹巻を持って出る團十郎是を福助の前へ出し(團)此はら巻こそは先君頼朝公南都東大寺大佛供養の砌り召させたまひし御はら巻ト是より、御參詣の砌り某し思ふ旨有て御束帶の下此腹巻を召させられ候様御意見申上候所御許容あつて此腹巻を召させられしが果して其日

の御災厄をのがれさせ還御の後某しを召させられ其方が意見にて頼朝大厄を遁がれたりと再び君の御紀念に下されしを今日又候わが君へ獻上いたすも忠義の道ト團十郎涙ながら諫める此件よろしく是を(權)其外は、懸る大禮に腹巻甲冑等は皆武家の曲禮なり朝家の儀式になしとて覺阿の諫めつひに用ひられず(福)も、源家の運命はやせまれりと見破りし思入いろく有て(團)懸る上は是非に及ばずト團十郎は、是が一生のお別れかトよそながら暇を告げるといふ(女寅)其外も是非なき事ト双方いはずかたらずの仕打よろしく有て幕

○大詰 鶴ヶ岡御社參の場「ふたい上手石段銀杏の大木廻廊の書割篋りんどうの紋付し幕を張り一面の雪のつもりし体よろしく爰へ(相中)の大名(同)神職出て、今夜の御社參よいあんばいに雪は止みしが何にいたせ昨日より非常の寒さ最早君には段かつらを過たまふと聞けばこれへ御出よ近からんとよろしく出向ふ爰へ向ふ將軍寶朝公



(福助)東帯(團十郎)北條義時にて實朝公の御太刀の役に  
て次に、文章博士仲章(權十郎)此外(猿藏、染五郎、鯉之  
助)など公家東帯(蟹十郎)師憲直垂此外(新藏)の信光  
(猿之助)の景盛など(白丁)大せい付て出て来り花道へ懸  
る時(團)のよし時俄に腹痛の体よろしく是を見て(福)ス  
リヤよし時いかせし(皆)これ、京兆殿いかに  
なされし(團)脇ばらを押へ苦痛の体にて、神宮寺を出  
升夫迄は別異状なありしが心神よわか又腦亂なし眼く  
らみて度を失ふ御免下され(福)俄の違例難澁ならん早  
く典薬をゆして看病いたし遣はせ(團)アイヤ其儀に及ば  
ず目まひいたすは日頃の持病ト辭退するこなし有てト  
、只君の御劍を守るは氣懸り仲章殿何卒御劍をおたの  
み申すト持つたる實朝の太刀を權十郎へ渡す權十郎代つ  
て勤める(福)然らば神宮寺へ罷こし養生いたせ(團)かた  
とけのふ存じ升ト一禮して跡へ残る此時福助先に(皆々)  
石段へ懸りト本社へは入りたる体跡(團十郎)へた

ばり乍ら實朝のゆくを見送りそつと顔を上げ冠りを正し  
衣紋を繕ろひ禍ひを是でのがれたといふ思入よろしくい  
ふト下手へは入る跡本つり鐘物すこき鳴物よて下手  
幕張をわけ内方(菊五郎)公曉禪師法師頭巾白の衣の下へ  
銀金物のほら巻小手脚當わらとにて忍んで出て實朝の歸  
りをねらふといふ見得よろしく又幕の内へ隠れる間もな  
く御下向トよ鳴物に成り石段方實朝(福)仲章(權十郎)  
其外下りて来るを銀杏の木陰より公曉(菊五郎)太刀を  
ぬき飛び懸り(菊)右大臣家父の御敵公曉御首したまはり  
しテト肩先を切下る是にて福助アツトいひさま血けふり  
立て倒れる(菊)は猶仲章(權)を返す刀にて切倒し、おの  
れ義時公曉が刀受て見よト此内手早く福助の首を切落し  
衣の袖に包んで仲章を見て、こりやよし時でなかりし  
人違ひかど悔りこなしト行ふとする爰へ信光(新藏)景  
盛猿之助(物)をもいはす(菊)を抱留る(菊)是をふり拂ひ  
此内はた(大勢)出て菊五郎へ懸る大立廻りに成りよ

ろしく有てト(菊)を折重なつて捕らへし見得鳴物にて

幕  
○中瀬久所作事

### ○春興鏡獅子

長唄囃子連中

本ふたいの道具御本九大典金張付牡丹の瀟の道具よろし  
く爰に(團八)お末ひな(新藏)同おます扣へ奥用人(翫  
太郎、猿藏)一本ざしにて扣へ居て(女中)詠らんの獅子を  
臺へのせ持居て、今日は七草の御祝ひ吉例のお鏡曳ゆへ  
大奥で御小性の彌生どのへ獅子の舞の御所望夫ゆへわた  
くし共は小道具の御役ゆへとんないにかいそがしふムり升  
ふ(翫、猿)わし夫で例の長唄やはやし連中を御招きに相  
成つたか何にしる夫の拜見したひもの(團八)夫よ御臺さ  
まには文珠さまが御信仰ゆへ此御獅子でも御籠略にはな  
され升ぬト此様なせりふ四人へわたりト下手へは入る  
跡直に知らせに付正面より長唄囃子連中居ならびたる難

段を押し出し長唄はやしと成り(團十郎)お小性彌生ふり  
袖にて出て是をいせん(團八、新藏)の女中すゝめて所  
作事に成り是より文句の振よろしく有てト飾りある獅  
子頭自然と團十郎へ乗りうつるといふ仕かけ能程に(さ  
ね子、ふき子)の兩人胡蝶の舞にて出て来りよろしく牡丹  
に戯むる、といふ所作事よろしく能程に(團十郎)石橋白  
頭に成り真中より牡丹の花をさしたる臺を押し出し是に  
て石橋のふり有て幕

○第二番目狂言

### ○黒手組一対白柄

三幕

○序滿來「忍ヶ岡道行の場」舞臺の遠見向ふ黒門より袴腰  
町家などの審判よろしく爰に判人忠藏(翫太郎)わかいも  
の(新相中)二人立懸り居て(秀調)浪人もの、女房おさが  
(かめ藏)同娘おさを押へ付て居て(翫)サア白玉をどこ  
へ逃したかサアいへトせまる(秀)たどへ其日に困り



升てまがない暮しをしてをり升ても一旦得心で三浦屋へ勤め奉公まやつた娘何でかくし升ふと疑ひいらして下さり升(飯)成程正直なおめへ方の事さか嘘でもあるめへから夫じやアさつと知ねへか(秀)不所存もの、娘が参り升たら直三浦屋さまへ歸る様に意見をしてお返し申升ふ(飯)夫じやア頼んだ下外をさがして見様ト三人よろしくは入る跡(秀)ア、不孝もの、ア、白玉まだ此母に苦勞を懸るかト癪のさし込し思入是を(かめ)いろく介抱してト、兩人下手へは入る跡清元連中の上るりに成り文句よろしく有て向ふより番頭權九郎(猿之助)新造白玉(榮三郎)にて出て道行のふり事よろしく有て(猿の)コレ白玉トせりふ有て(榮三)何にしる此江戸に居ては追手の懸るは必定ゆへとふか大坂へでも欠落して二人暮したいもの(猿の)夫の元より望む所(榮三)夫に付ても路用のお金がムんすかへ(猿の)ある共くト懐中より財布には入りし五十兩出してこれは旦那のお金をちよろまかしそ

なたと二人道行の路用にするのじや(榮三)そりや此お金はほんまのお金かへ(猿の)何とやさしい權九郎であらふがト此内上るり振よろしくある事ト、財布を頂さよろこんで居る所へ下手な、牛若傳次(菊之助)巾着切にて件の金を奪ふ(猿の)悔りしてやるまいと立廻りの内(菊の)ハ(猿の)を不忍の池へ突倒し打込(榮三)傳次さん(菊の)コレト兩人顔見合せうまいつたど悦ぶ是方(兩人)權九郎を玉に遣つて廓を抜出たといふ事をいふ爰へいせんのおさが(秀)妹(かめ)出て、ヤお前は吉原の姉さんじや(秀)何娘かト左右より絶られ是方廓をぬけ出たもへ此母が疑ぐられ迷惑をするゆへとふと是から三浦屋へ歸つて詫言してくれト意見の件よろしく(菊の)も母への義理にまがらみ一旦廓へ歸れト終に白玉、傳次別れの件に成り清元の上るり切て廻る

○同袴腰の道具爰に白酒賣新兵衛(松助)荷を下し、獨りの娘を三浦屋へ勤め奉公夫に付ても判人の門門兵衛とい

ふものむしが無筆ゆへ渡した證文五兩の間へ十の字を書入養女に貰つたゆふにまんがとふかして娘が年もわけ早ふ親子でくらしたいト爰へ傳次(菊の)出て、白酒をのみ看板を見て、こりやアお家流でよく書てあるなト行燈へ目をつける爰へ手先(音次郎、音藏)出て傳次を捕へ様とする(菊の)は權九郎より盗んだ五十兩持て居ては證據に成らふト白酒の桶の中へそつと入れつひに捕縛されては入る新兵衛(松助)悔りして、扱ひ今の泥坊であつたりト桶の中に五十兩ありしを見て悔り爰へいせんの權九郎(猿の)池より這ひ上りおかしみ有てよろしく幕

○二幕目「吉原仲の町の場」三月櫻の盛りの道具爰に門門兵衛(市藏)權九郎(猿の助)茶屋へかけ居て(市)いつつや五十兩に預つた刀の折紙あれいどうしてくれる(市)あれは鳥居新左衛門さまから預かつた北辰丸の折紙今も三浦屋の揚巻がおらが養女に成つて居るから金のつるよ有つく事がある金さへ道入れ受るから待つてくれト兩人

は入る跡へ鳥居の門弟(蟹十郎、菊四郎、幸十郎、松助、團七)出て茶屋女房(菊三郎)わかいもの(菊五郎、扇藏)出て是はくよ御出(門弟)何か肴をといふ所へ向ふか白酒の荷をかつぎ新兵衛(松助)出る是を門弟白酒をのみ代を拂ひす無法をいふ(松)夫では困り升といふのを打擲する事ト、向ふへ逃ては入るを黒手組の助六(菊五郎)門弟の手を捻上げ(松)を助けて出てせりふ有て門弟散くよこらされ逃ては入る跡(松)命の親と禮をいふ(菊)シテ七十近いぢいさんねめへ子はないかト聞く是にて(松)娘は三浦屋で揚巻といふ女郎是も門兵衛といふ判人に頼み七十兩で渡したら其夜押上の土手で盗人に出遭ひ金をとられる所を五十有餘の浪人体の方が通り懸り其賊をこらして下すつた所其同類が後から物をも言ず一人の士が出て其お方を切倒し金を取て行術知れず只お氣の毒なは其お浪人さま夫うらは是非なく門兵衛さまへ泣けて五兩借りたが其證文に十の字を書入娘の養女に貰ふたど難題ト此



事を聞わが父を討れし其夜なるかト助六思入有て別れ  
る此跡へ紀文(權十郎)晋山(新藏)出て、助六の親の敵を  
討ツ身分喧嘩〜といふのは刀を探す爲であらふが多く  
の内には其身を亡しつゝ親の敵も討てまい向後喧嘩はせ  
ぬがいひト意見の件蛇の目の傘によそへてせりふ有て脇  
差へ父の紀念の發句の書し紙にて封印を付るトいふ件よ  
ろしく此道具廻る

○同三浦屋の場爰は揚巻(福助)白玉(榮三郎)新造(秀世)  
わやめ、佳調(遣手)團八(白玉)をせつかんの件爰へ鳥居新  
左衛門(團十郎)門弟五人付て、揚巻を身受するといふ揚  
巻は助六さんと約束したうらいやだといふ(團)男の意地  
ゆへ身受するといふ爰へ助六(菊五郎)禿(丑之助)も引張  
られ出て是々新左衛門との出合さつ門弟をこらした意  
趣返しに門弟の打擲にあへども紀文の意見を守つて手出  
しをせぬといふ思入ト、煙草をやらふト(團)木履の先へ  
させるをつけて出す此時の白刃を見て(菊)焼及金色扱は

北辰九ト此氣味合跡紀文が實意にて揚巻の身受整ひ夫婦  
も成るといふ件よろしく有て幕

○大切「花川戸助六内の場」爰へ新兵衛(松助)勇と成て居  
る傳次(菊之助)白酒の桶へ打込し金五十兩取に来る是は  
(松)助六門兵衛に迫られ偽證文の五十兩返せし時遣ひし  
が新兵衛は拾ひし金といはずに居る是を助六聞て牛若の  
金ならいづれ不正な金と悟り一心に引受て新兵衛を救ひ  
ふといふ義心傳次も白玉がかくまひある事を知つて助六  
が男氣に感じ此金の持主は己だと自訴しやうといふ件  
○東橋祭禮の場に成り町方同心へ傳次悪事を訴へる後助  
六の父の敵新左衛門と知れ本望を達す脚色目出度打出し

明治廿六年三月十一日印刷

定價金八錢

全 三月十二日出

京橋區木挽町三丁目十四番地

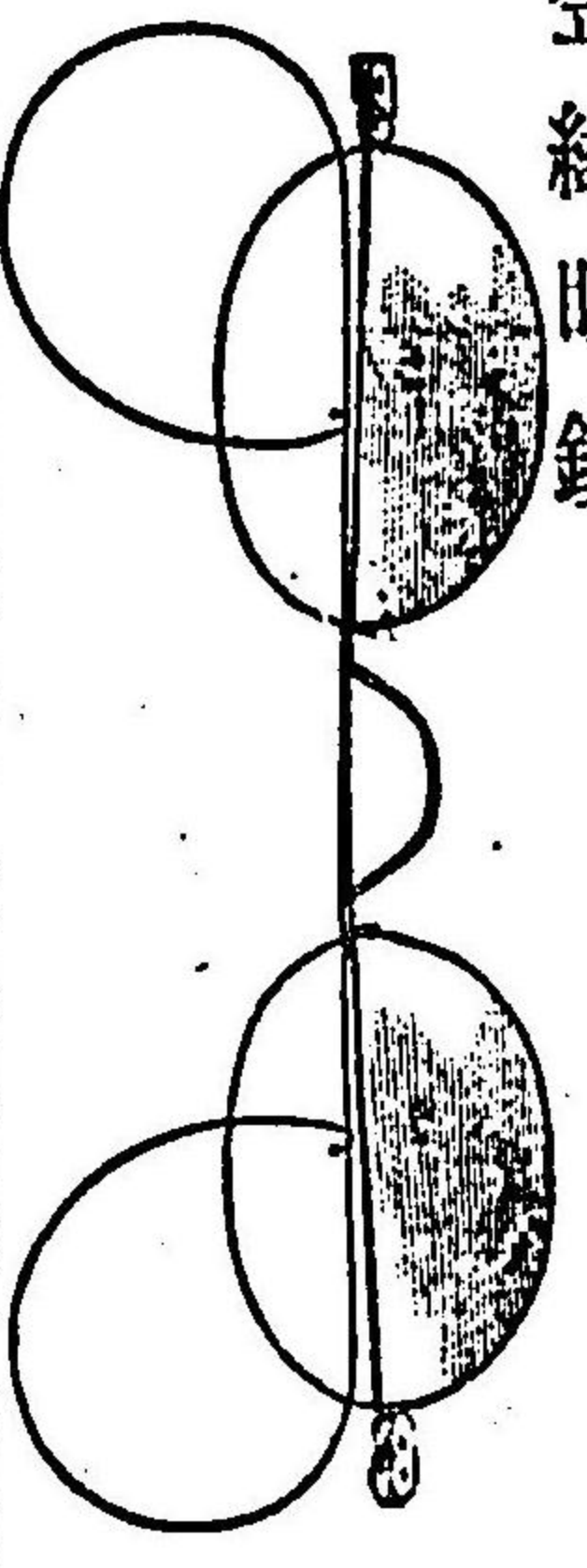
編輯兼 發行者 鈴木孝平

日本橋區本町三丁目十番地

印刷 井上吉次郎



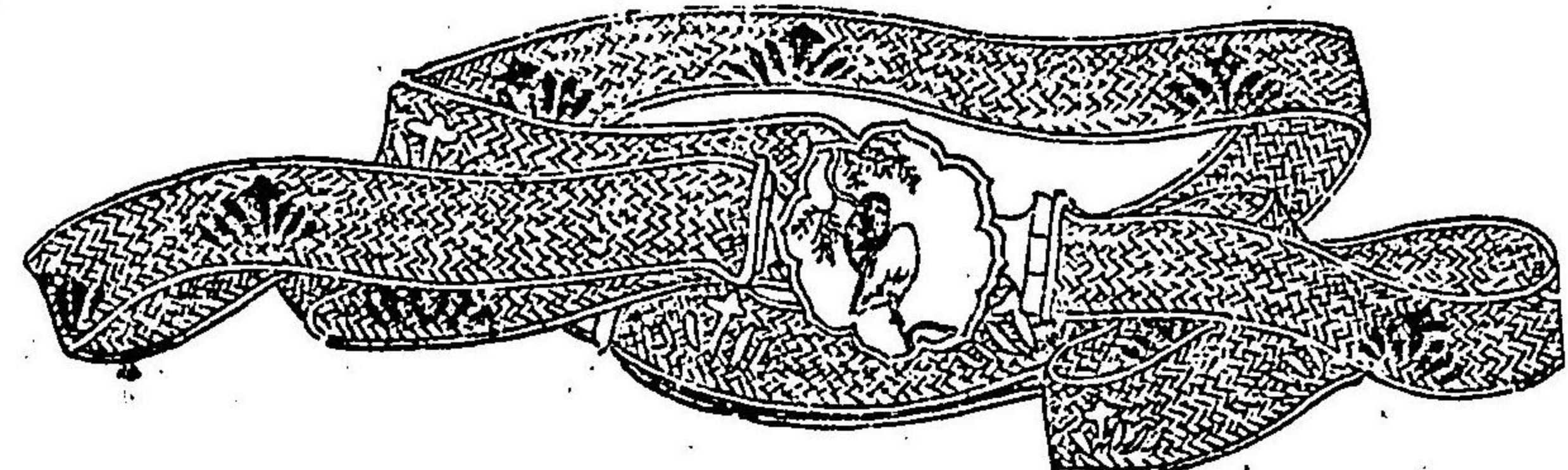
金縁眼鏡



甲價金拾五圓五拾錢○乙拾參圓○丙拾壹圓○  
 丁九圓○戊七圓七拾錢○己五圓五拾錢○外に  
 銀縁五圓○參圓五拾錢○遞送費金貳拾錢  
 右玉は近眼用老眼用とも一々試験器  
 に照して其度を格にす、縁は種々あ  
 り何れも金の證明書を附し若し其  
 證明に負くてあれば何時にても他品  
 と交換するか又は原價を返戻するこ  
 と、購求後若し貴意に適はざる時一  
 週間(遠方御注文の分は往復日數  
 を加ふ)以内は御承知あらんことを冀ふ  
 等の詳細は屢々諸新聞紙に廣告する  
 弊店則ち御承知あらんことを冀ふ

東京市京橋區尾張町二丁目十  
 八番地○電話番號三百三十三  
**天賞堂**

御婦人用御帶止



金又はブラチナに草木花實鳥獸虫  
 魚古代模様等の形容を彫刻し或は  
 種々の寶石寶玉を裝嵌したるもの  
 甲價金四拾圓○乙三拾五圓○丙三拾圓○  
 丁廿五圓○戊二拾圓○己拾五圓○庚拾圓○  
 辛八圓  
 右の金ものは何れも名工の手に成  
 り紐は織物或は種々の新形又は古  
 代の組方よ倣ひたる絹打よて其製  
 作都て壯麗にして優美なり尤も彫  
 刻の疎密あるひは寶石の大小よ依  
 りて代價にも高下あれば冀くは車  
 を枉て弊室に臨み其現品を御覽じ  
 玉へ但し遠隔の地ならば郵便にて  
 御注文を下し玉へ代金御送附次第  
 その價に相當の品を精撰して調進  
 し參らせ聊かにも御信用に負く  
 事は候はず若思召に叶はざる時は  
 他品と交換し玉ふとも原價を取戻  
 させ玉ふとも御望の隨意に候ふべ  
 し其手續ともは屢々各新聞紙に廣  
 告したる弊店則ち詳らかなり

東京市京橋區尾張町二丁目  
 十八番地○電話番號三百三十三番  
**天賞堂**



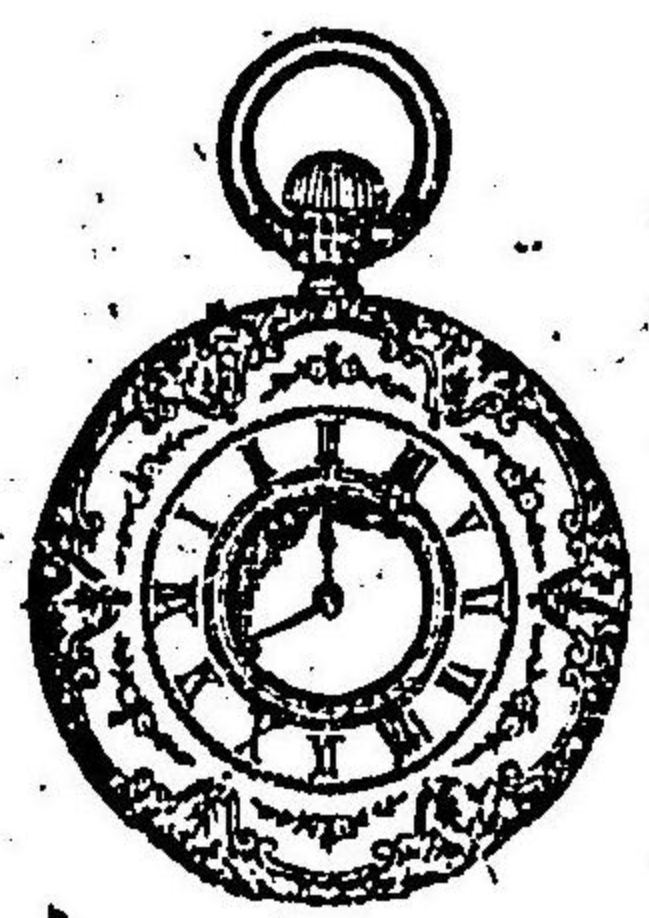
金製指環  
ダイヤモンド、ルビー、エメラルド、  
他貴金屬及寶石入組工物御好請進仕候



此の外金若しくは白金地へ寶石寶玉を装嵌  
したるもの又は種々の彫刻を施したるもの  
許多有之候間御來車の上現品御一覽下さる  
か郵便御注文なれば寶石人若しくは彫刻附  
等の區別を指示し代金御送付あれば其價に  
相當の品を精撰して調進すべし若し貴意に  
適はざる時は購求當日より一週間(本店商  
品中時計に限り三十日)以内は(府外は相當  
の往復日數を加ふべし)凡そ其物品に破損  
毀傷なきに於ては何時にても需に應じて他  
の物品と交換し又は原價にて買戻し聊かた  
りとも其爲に手数料若しくは割引等を加へさ  
るべし其他の手續は屢々各新聞紙に廣告す  
る所の弊店店則に詳なり

●東京市京橋區尾張町二丁目十八番地  
●電話番號三百卅三

天賞堂



○貴婦人持時計

- 金剛無雙龍頭卷懐中時計甲價七十五圓●
- 乙價六十五圓●丙價五十四圓●丁價四十五
- 圓●戊價三十三圓●己價廿九圓●全片硝
- 子價二十九圓●全價二十五圓●全價十七
- 圓五十錢●全無雙ダイヤモンド入裝飾付
- 甲價百十五圓●乙價八十五圓●丙價六十
- 五圓●丁價四十五圓●全片硝子價四十五
- 圓●全價三十三圓●銀州●双價十五圓●
- 全價十二圓五十錢●全價十圓●全片硝子
- 價十一圓五十錢●全價九圓●全價七圓五
- 十錢

●双眼鏡

- 甲價十七圓五十錢●乙價十三圓●丙價十
- 圓●丁價七圓●戊價五圓五十錢●己價三
- 圓五十錢●全蝶貝甲價二十圓●乙價十七
- 圓●丙價十三圓五十錢●丁價十圓五十錢
- 戊價九圓●己價七圓五十錢

●東京市京橋區尾張町二丁目十八番地

天賞堂

電話三百三十三番







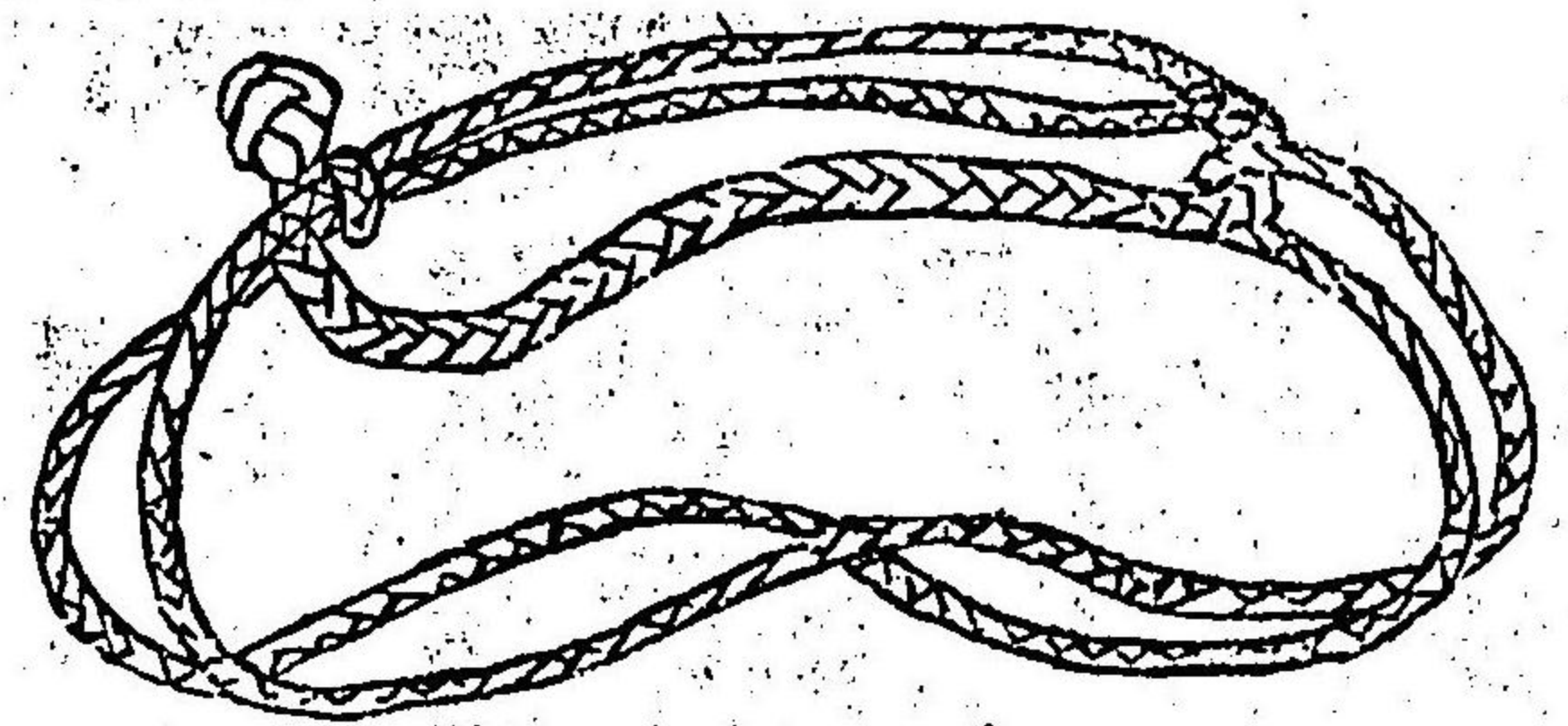
福助好み

登意匠

# 都志女

一名便利をびとめ

代價金三十錢ヨリ金六十錢迄



今般發明せし便利帶止め都志女と稱するは弊店が年來の経験と斬新なる意匠とを以て調製する處なる故品質の優美高尚なるは素より金銀寶石等をも併入するを得現品は絹糸一色而已にして組織せしゆな長く使用する共決して伸縮の患なく實に經濟上無類の徳用佳品なり且此品は袖止めとして使用するに止まらず御時計の紐に應用すれば和洋服共實にうつりよく候即ち紳士達願はくは御試用の上何卒御賞賛御座三階運動場にて御覧の上御購求被成下度奉願上候

案出製造人

下谷區池の端仲町角

大道明新吉兵衛

大日本橋區芳町佐竹組絲舖下谷四町松駒屋野田安太郎南條馬町一伊勢屋方  
大日本橋區人形町通吉野屋源藏淺草並木町三芳屋野田安太郎南條馬町一伊勢屋方  
大日本橋區小池屋鈴木下谷上車坂町櫻香本舖守田淺草馬道八丁目松井朝英堂下谷  
大日本橋區池の端仲町鈴木茂八全玉寶堂伊兵衛 意匠登錄出願中

## 精五 廉價 三印版

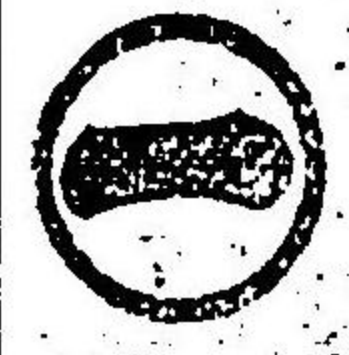


東京市日本橋區人形町通大傳馬町二丁目 竹素堂藤水

四十八百七話電

### 袋物販賣廣告

煙草入紙入弗入其外附屬品類 各種  
替り革并に婦人用手提カバン類  
上野公園陳列館内 熊谷出品店  
芝公園勸工會社内 熊谷出品店  
小賣販賣所 芝愛宕下第 熊谷出品店  
二壬辰館内 東京日本橋區藥研堀町



製造 本屋 熊谷卯八

## 金銀

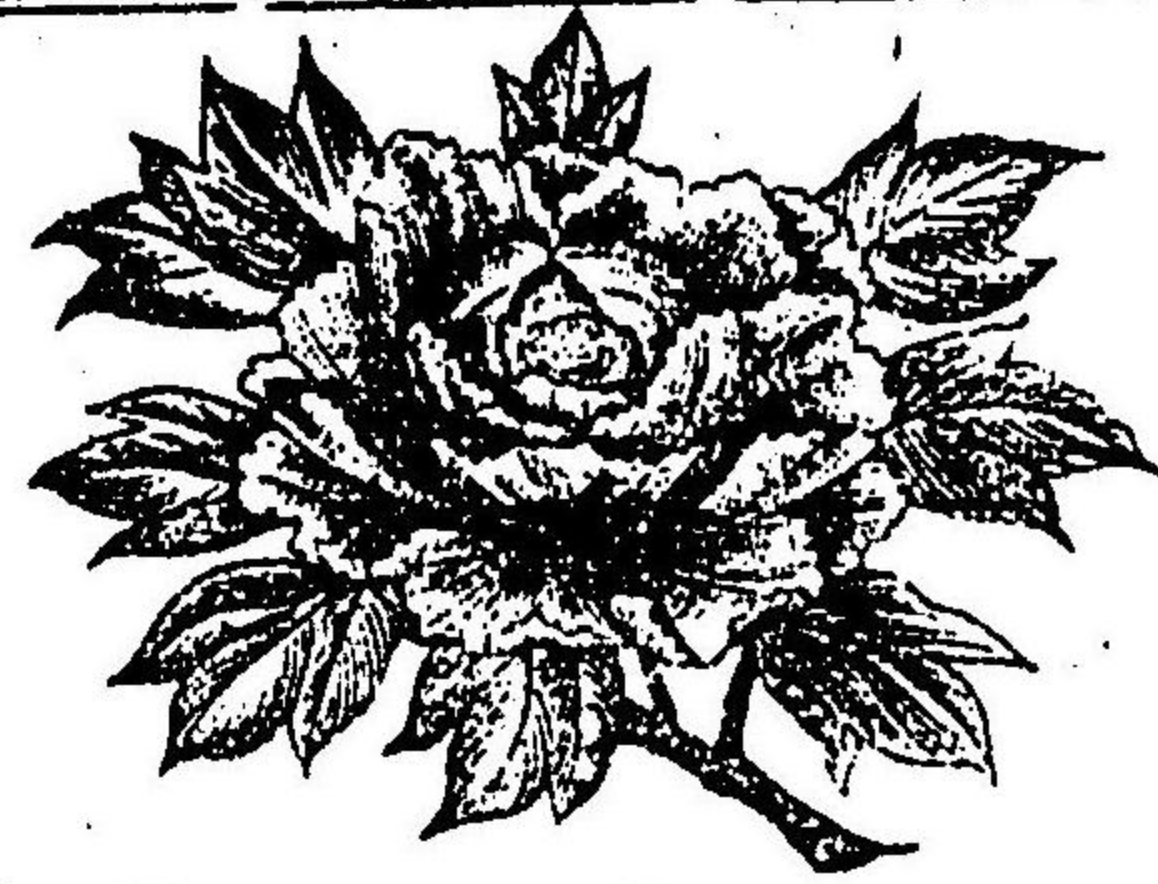
純金銀地金漬及古金銀赤銅四分一刀劔  
其他金銀附屬品一切永年實直に賣買仕  
居候間何卒御用願上候  
東京市本郷四丁目十一番地 金子商塵







標商 錄登



○新製細卷大江戸 五拾本入六錢

香氣ある火持長き紙巻煙草にして美麗なる箱入

○新製兩切紙卷ウオールド 貳拾本入四錢

舶來紙卷の如き兩口紙巻煙草なり新發明の竹製パイプを添へ寫真入りなり

○細舶來 刻みかど 五拾本入八錢

舶來刻煙草を極細卷にせし品寫真人箱製

○荒切 刻福お軍 五拾 々廿貳錢

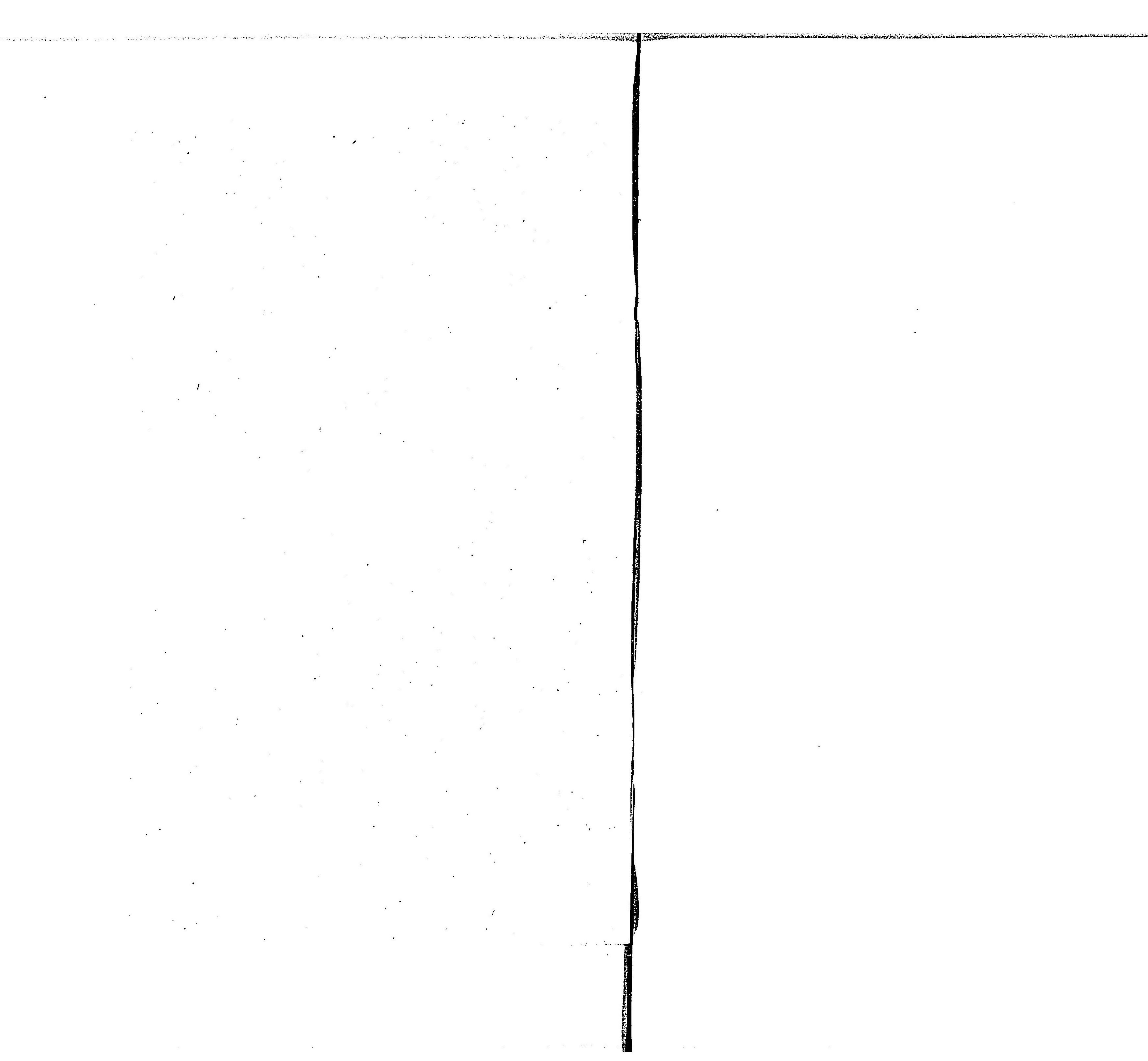
福將軍は薩摩國分其他銘葉を配合せし荒切刻煙草 夏季の御香料に適當の品なり且つ舶來刻の如く手巻用ともなる至極便利徳用の煙草

○國精 製分 白牡丹 五拾 々廿五錢

白牡丹は細切の刻煙草極めて温良の香口なり

東 京 市 和 千 電  
 橋 京 洋 松 葉 番  
 區 煙 葉 松 千 號  
 座 草 葉 松 千  
 壹 草 葉 松 千  
 丁 問 屋 兵 拾 五  
 目 屋 兵 拾 五  
 四 番 衛 六 番  
 地 番 衛 六 番







特 67  
414



074794-001-3

特67-414

歌舞伎座筋書 第14, 15号

歌舞伎座

M26

CEK-0101

